

# 美空映画（1952.7 - 1955.6）の特徴

## ——恋するひばりの誕生——

斎藤 完

The Characteristics of the Movies of Hibari Misora  
(1952.7 - 1955.6)

SAITO Mitsuru

(Received September 30, 2011)

### 1. はじめに

本稿に先行する「美空ひばりの普及と映画の関係（1952.7 - 1955.6）」では、対象期間における美空の圧倒的な人気、普及媒体としての映画の有効性、そして演技の比重が増すとともに「映画女優」としても評価されつつあったことを明らかにした。

それでは映画に映し出された彼女はいかなるものであったのか。

「初期美空映画の特徴」（斎藤 2010）で指摘した特徴——血の繋がった親のいない子どもという役柄／親との再会（親の出現）という展開／（子どもによる）労働、他人との共同生活という展開／物語の展開上、必然的な歌唱場面（再会の契機・経済行為・他人との交流）——は維持されたのか、あるいは破棄されたのか。

### 2. 転換期、あるいは危機説

美空ひばりほど、そのキャリアに対する危機説が何度も囁かれた「スター」はいないだろう。それは言うまでもなく、常に維持している高い人気が災いした結果であるとも言える。

それらの説は具体的な根拠に基づくものから憶測の域を出ないものまでさまざまだが、この時期のそれは前者であった。すなわち子役として受容されていた美空を限界視するまなざしである。振り返ってみれば、初期美空映画の特徴のいくつかは、彼女が子どもであることが必須条件であった。美空ひばりは1937年5月生まれ。この時期、すでに15歳になっていた。

高い人気をもたらせた従来の路線から新しい路線へと移行する必要性は、すでに1952年7月——『平凡』誌の人気投票で初の第一位を獲得した数か月後——には報じられていた。たとえば『近代映画』は「美空ひばりの会」という歌舞伎座でおこなわれたリサイタルを伝えながら「これは偉業である。そして、これからこそ、彼女の将来と云うものが、いろいろな角度から論議されて行くだろう。云いかえれば、美空ひばりが何処へ行くかと云うことが、真剣に検討されてくるだろう（1952.07a：4）」としている。また、『映画ファン』でも「あたらしく脱皮するひばりちゃん」として一頁を割きながら「美空ひばりの会」の様子を伝え、同会が現状を脱する「何かの手がかりになるような気がする」としている（1952.07b：31）。

美空サイドもその必要性を認識していた。彼女のマネージメントをしていた福島通人は、同会の数か月まえに次のように述べている。

たしかに、今年はむずかしいところです。それだけに映画の本数も減らし、新面目を出すような大作のみを考えるつもりです。(中略) 転換をうまく乗り越えて、高峰秀子さんのように成年スタアとしての境地をつくってやりたい(1952:50)。

これは「美空ひばりは大人ぼくなって、今年は転換期だ」という説もある。これに対して育ての親は、どう考えているか? という問いに対しての答えである。そして、「新面目を出すような大作」とは1952年9月17日公開の『牛若丸』を指していた。美空が一人二役。企画段階では監督に谷口千吉や黒澤明や山本嘉次郎を、相手役に三船敏郎(弁慶)と田中絹代(常盤御前)を考えていたようである<sup>1</sup>。

だが、新面目が認められることはなかった。

『キネマ旬報』は美空の演技に好評価を与えながらも、「美空の映画としては、最も当らなかった。企画・製作ともに狙いが外れた感じで、題名も弱い」としている(滋野 1952:62)。『映画ファン』は同作品を「児童映画」とみなし、「美空ひばりの主演物ならどんな作品でも当る(今迄がそうだった)という甘い営利主義」の敗北に意義を見出している(大黒 1952:119)。『近代映画』に至っては「論ずるに足らない」(尾崎 1952:100)と一刀両断である。

『牛若丸』の結果はさらに「美空の人気の後退」に関連づけられた。『近代映画』では同作品のみならず、続く『二人の瞳』や『リンゴ園の少女』をそれぞれ「失敗」「パッとしない」としながら、次のように述べられている。

由来、子役の人気は、(中略)一時はのし上がるが決して長続きはしない。子役に背負わされた宿命である。美空は今それを身を以て体験しているわけだ(基井 1953:78)。

しかしながら、結果から見ればこの指摘は的外れで、圧倒的な人気は不動であった。

だが、現実問題として加齢は存在した。

美空はどのようにしてこの「危機」を乗り越えたのであろうか。換言すると、この時期における映画は美空をどのように伝えたのだろうか。

### 3. 松竹優勢時代前期的特徴の行方

まずは、従来の路線が当該期間においてどのようになったかを見てみたい<sup>2</sup>。

#### ①作品冒頭での家族状況

表1①に明らかなように、血の繋がった親(両親/片親)がいないという、作品冒頭で与えられた家族状況は従来どおりである。だがこの時期には、片親を欠く場合に決まって不在なの

<sup>1</sup> 監督は大曾根辰夫で落ち着いたものの、撮影開始となっても相手役は決まらず「美空ひばりは、憤慨して東京へ帰ってしまった」ために、一時は「止むなくクランク中止してしまった」(近代映画:1952.10:155)。結局、三船ではなく水島新太郎、田中ではなく水戸光子が相手役となった。

<sup>2</sup> 「初期美空映画の特徴」(斎藤 2010b)において出演率が2割以上の作品を「美空映画」としてそれらを分析したが、本稿でも同様の基準を用い、『三太頑張れッ!』『青春航路 海の若人』を除外する。また、歌唱場面を集めた作品も除外するので、『ひばりの歌う玉手箱』『美空ひばりの春は唄から』も扱わない。なお未見ではあるが、『唄しぐれ おしどり若衆』『八百屋お七 ふり袖月夜』は内容から「美空映画」と認められるので、プレスシートなどを参照しながら対象に加えることとする。

は母親であるというそれまでにはなかった傾向もみられ、以前と全く同じというわけではない。なお、両親が健在する作品（⑧、⑱）もあるが、数のうえからは例外的であると言えよう。

⑧家族状況の変化

表1⑧を見ると、それまでのあり方——親兄弟が出現するなどにより家族状況が変化するという展開——が減少していることがわかる。以前は16作品中14作品にみられたこの傾向が、23作品中10作品のみとなっている<sup>3</sup>。だが、この路線はある時期を境に破棄されたわけではない。不定期ではあるがときおり用いられる展開なので、いわゆる「定番」とまでは言えないものの、一つのパターンとして定着したという見方もできるであろう。

⑨家族状況に起因する行動

当該期間の初期（④『リンゴ園の少女』まで）以降になると、松竹優勢時代前期に特徴的な行動（労働と他人との共同生活）のみならず、家族状況が美空にながしかの行動を起こさせること自体、少なくなる。だが、不定期ではあるがときおり現われる展開なので、「⑧家族状況の変化」と同様に一つのパターンとして定着したと言えるかもしれない。

【表1】松竹優勢時代前期における特徴の有無<sup>4</sup>

	④作品冒頭での家族状況	⑧家族状況の変化	⑨家族状況に起因する行動	⑩物語の展開上、必然的な歌唱場面		
				再会	経済	交流
①ひばりのサーカス 悲しき小鳩	父のみ	母の出現	父母の復縁を図る		○	
②牛若丸（二役）	牛若丸 家族なし	母の存在知る	母に会おうとする	○		
	桔梗 両親あり					
③二人の瞳	家族なし		共同生活／路上楽団		○	○
④リンゴ園の少女	祖父のみ	父の出現	歌への意欲が増す	○		
⑤ひばり 姫初夢道中	父のみ				○	
⑥姉妹	両親、姉2人					
⑨ひばりの陽気な天使	父のみ					○
⑩ひばり 捕物帳 唄祭り八百八町	養父、義姉2人	実父の出現				
⑪ひばりの悲しき瞳	父、姉					
⑫山を守る兄弟	兄のみ					
⑬お嬢さん社長	祖父のみ	母方祖父、出現			○	○
⑮ひよどり草紙	養父のみ	姉の出現				
⑯伊豆の踊子	兄と兄の家族		共同生活／旅芸人		○	
⑰唄しぐれ おしどり若衆	兄のみ	兄の死	兄の汚名挽回を図る			
⑱青春ロマンスシート 青草に坐す	両親、弟、叔母					
⑲びっくり五十三次	養父母、義姉				○	
⑳八百屋お七 ふり袖月夜	父のみ	母の出現				

<sup>3</sup> 出演作品数は27であるが、美空映画に限定しているため23となっている（⑥⑦⑭⑱を除外）。

<sup>4</sup> 丸数字は本稿に先行する「美空ひばりの普及と映画の関係（1952.7 - 1955.6）」における表5のそれに対応している。

㉑若き日は悲し (二役)	恵子	父、兄	兄、他人と判明	恋愛感情の発生			
	本人	不明				○	
㉒歌ごよみ お夏清十郎		父のみ				○	
㉓七変化狸御殿		家族なし					
㉔大江戸千両囃子		家族なし	姉の出現	共同生活／女歌舞伎		○	
㉕娘船頭さん		祖父、兄					
㉗歌まつり満月狸合戦 (二役)	お春	養父、姉	実父使者、出現	実父の元へ旅立つ			
	お菊	不明	妹の出現				

㉑物語の展開上、必然的な歌唱場面

- ・再会の契機：松竹優勢時代前期では美空の歌声が親兄弟との再会をもたらす契機となっていたが、当該期間である後期ではわずか2例が見られるのみである。その最後が「㉑家族状況に起因する行動」と同様に㉔であるのは、偶然というよりは、むしろ従来の路線の終わりをこの作品に認めることができる証左となっているかもしれない。
- ・経済行為：歌うことが直接的／間接的な収入につながるのは、前期では16作品中12作品であったのに対し、後期では23のうち9と減少している<sup>5</sup>。だが、音楽を職業としている場合は軒並み歌唱率が高く、その多くが正月・盆興行作品にみられることから、経済的歌唱行動が特定の時期における一つのパターンとして確立したと言えるかもしれない。
- ・他人との交流：前期では歌うことによって他人だった人（たち）との距離が縮まり、円滑な関係が形成されるという傾向があった（16作品中7）が、後期はわずかに3例のみである。

4. 松竹優勢時代後期における新機軸

新しい路線を検討するにあたり、いま一度、板倉による美空のフィルモグラフィ区分——「少女」時代と「娘」時代——に注目したい。

板倉（2009）によれば美空の映画歴を二つの時期に分かつ大きな要素は「ひばりが異性に恋をしたり、異性から恋をされたりという恋愛のプロット（62）」の有無である。たしかに松竹優勢時代前期には恋愛という要素が希薄であった。『あの丘越えて』や『月形半平太』でそうしたプロットを指摘することができるものの、全体から見れば例外的な作品であると言えよう。

いずれにしても後期における新しい路線として恋愛のプロットは検討するに値するだろう。

恋愛と並んで検討しておきたいのが、時代設定である。美空の主演作品を論じた先行研究（板倉 2009、小川 2006、鷺谷 2006）のすべてが時代劇——順に「異性装時代劇」「チャンバラ映画」「女の活劇」——に焦点を当てている。時代劇出演が特徴的となるのは東映との関係が深くなってからというのが通説だが、いま一度それを検討してみたい。

また、三者が共通して関心を寄せている異性装についても同様の理由でみてみたい。

最後に、この時期から特徴的になる歌唱場面のあり方を一覧化し、傾向の有無を探りたい。

㉑恋愛のプロット

当該期間の作品中における「恋愛模様」に目を向けると、二つのあり方が認められる。

一つは美空以外の登場人物間での恋愛である場合、そしてもう一つが美空本人が恋愛の当事者となる場合である。その状況は表2に前者を㉑、後者を㉒として一覧化している。

<sup>5</sup> ㉑『若き日は悲し』における本人役で舞台出演することも経済行為としてカウントしている。

## ㊦美空以外の恋愛

単に恋愛関係が窺える場合には○を、その関係に美空が感情や考えを表明する場合には◎とした。その表明は、姉たちの恋愛を手伝おうとする（⑧）、姉の恋愛を冷やかす（⑪）、三角関係——美空の片思い——（⑬）、父の女性関係を目撃し怒りを覚える（⑱）、駆け落ちをうらやむ／姉の恋に口を出す（⑲）、三角関係——横恋慕される——（㉒）である。なお、松竹優勢時代前期の美空映画を見渡すと、16作品中9作品<sup>6</sup>に美空以外で恋愛関係が見られるが、そのうち『あの丘越えて』を除いて美空が感情などを表わすことはない。

## ㊧美空の恋愛

前述の例外を除き、松竹優勢時代前期には恋愛のプロットはなかった。後期においてもその前半では同じ傾向を見せるが、⑬『お嬢さん社長』以降からは、美空が異性を思ったり／異性から思われたりするものが常態化する。だが、恋愛が映画の主題となることはほとんどなく、プレスシートに「恋」「愛」（あるいはその類似語）が美空に関連づけられて出現するのは⑬⑱⑳㉓㉔のみであり、作品を見る限り、恋愛感情が物語の軸となるのは⑬⑱⑳にすぎない。

## ㊨時代設定

時代劇／現代劇がほぼ交互に制作されているのが特徴的である。あえて付言すれば、この時期の前半は現代劇に、後半は時代劇に傾きを見せていることも指摘できる（㉓と㉔のいわゆる狸御殿ものは時代不詳ではあるが、衣装を基準にすれば時代劇に含めることも可能である）。なお、松竹優勢時代前期における時代劇出演は、美空映画に限定すれば16作品中3作品となる<sup>7</sup>。

【表2】松竹優勢時代後期における新機軸

	㊦恋愛のプロット		㊨時代設定			㊧服装		㊩歌唱場面 <sup>8</sup>	
	㊦美空外	㊦美空	時代劇	現代劇	不明	異性装	男役	鼻歌	娯楽
①ひばりのサーカス 悲しき小鳩	○			○				○	○
②牛若丸（二役）			○			○	○	○	
③二人の瞳				○					
④リンゴ園の少女	○			○					○
⑤ひばり姫初夢道中			○			○		○	
⑧姉妹	◎			○				○	○
⑨ひばりの陽気な天使				○					○
⑩ひばり捕物帳 唄祭り八百八町	○		○			○		○	○
⑪ひばりの悲しき瞳	◎			○					○
⑫山を守る兄弟	○		○			○	○	○	
⑬お嬢さん社長	◎	○		○		○			

<sup>6</sup> 『ラッキー百万円娘』『悲しき口笛』『憧れのハワイ航路』『東京キッド』『泣きぬれた人形』『鞍馬天狗 角兵衛獅子』『母を慕いて』『あの丘越えて』『月形半平太』を指す（『あの丘越えて』における関わりは三角関係——美空の片思い——である）。

<sup>7</sup> 『とんぼ返り道中』『鞍馬天狗 角兵衛獅子』『月形半平太』を指すが、美空映画以外（＝出演率20%未満の作品）にも3作品（『左近捕物帳 鮮血の手形』『鞍馬天狗 鞍馬の火祭』『鞍馬天狗 天狗廻状』）に出演している。

<sup>8</sup> 二役時の歌唱場面は次のとおり。『牛若丸』での鼻歌は桔梗役で、『若き日は悲し』での歌唱（鼻歌・娯楽）は恵子役で、『満月狸合戦』の鼻歌はお春・お菊役で、歌唱（娯楽）はお春役で。

⑮ひよどり草紙	○	○	○			○		○	
⑯伊豆の踊子		○		○				○	
⑰唄しぐれ おしどり若衆		○	○			○		/	/
⑱青春ロマンスシート 青草に坐す	◎	○		○				○	○
⑲びっくり五十三次	◎	○	○					○	○
⑳八百屋お七 ふり袖月夜		○	○					/	/
㉑若き日は悲し(二役)		○		○				○	○
㉒歌ごよみ お夏清十郎	◎	○	○						○
㉓七変化狸御殿		○			○	○		○	○
㉔大江戸千両囃子	○	○	○					○	○
㉕娘船頭さん	○	○		○				○	○
㉗歌まつり満月狸合戦(二役)		○			○	○		○	○

### ◎服装(男役/異性装)

板倉・小川・鷺谷の研究は、時代劇と異性装が密接な関係にあることに着目していた。しかしこの時期における時代劇10作品中4作品において、美空が男装することはなく、さらにはこれらの男装しない4作品は対象期間の後半に集中していることから、男装の美空によるアクション時代劇はいまだ定番化していないとみることができよう。そうは言うものの、男役(少年役)を演ずるのはわずか2作品であり、美空の異性装はあくまでも女役の彼女が男性の衣装をまとうのを基本とするという、のちの路線はすでにここに顕在化しているとも言える<sup>9</sup>。

### ①歌唱場面における「新機軸」

松竹優勢時代後期に顕著な歌唱場面は鼻歌を歌うことと娯楽として歌うことである。「鼻歌」としたが、移動中——歩きながら、乗り物に乗りながら——口ずさむことがほとんどである。例外的に、芝刈りをしながら(⑨)、洗濯をしながら(㉗)歌を口ずさむこともある。娯楽として歌うのは家族や友人などと内輪で楽しむ場合が中心だが、盆踊り(④㉗)や演芸大会(⑱㉓)などの公的な場で娯楽を「無償」で提供するという場合もみられる。

## 5. まとめ

以上から、松竹優勢時代後期における美空映画の特徴を要約すると以下のようになるだろう。

- ・血の繋がった親(両親/片親)の不在という家族状況の継続
- ・恋愛のプロットの常態化(後半から)
- ・交互に制作される時代劇/現代劇
- ・物語の展開とは連動しない歌唱場面の増加

これらの特徴のうち、とくに注目したいのが恋愛のプロットの常態化である。まさに板倉(2009)の区分——恋愛のプロットの有無による少女時代(=子役)/娘時代——が示唆しており、恋愛が子役からの転換を可能にしたと言えよう<sup>10</sup>。たとえば林勝俊(1954)は⑳『八百』

<sup>9</sup> ちなみに現代劇(⑬『お嬢さん社長』)での異性装は劇中劇(テレビ番組のレビューショー)におけるものである。

<sup>10</sup> なお、板倉は⑰『唄しぐれ おしどり若衆』を娘時代の始まりとしている。

屋お七 ふり袖月夜』評のなかで次のように述べている。

この映画を見て感じた事は、美空ひばりがいつの間にか少女役にさよならして、もはや殆ど完全に乙女の役、恋をする娘に成長していることである。美空ひばりが子役から大人への転換期がやって来て、一つの危機だと云われていたと思ったらいつの間にかその危機が通りすぎて、(中略) 不思議でも驚きでもあった (49)。

だが、ここで付言しておきたいのは、美空が恋愛の当事者になる以前（松竹優勢時代後期の前半）において、その準備段階が存在したということである。すなわち、美空以外の人物が恋愛をし、それに美空が感情や考えを積極的に表明する時期が存在したことが、美空自身が恋愛のプロットに関わることを容易にしたのである。

また、恋愛のプロットが導入されたと言っても、(わずかな例外を除き) それが映画の主題となったわけではないことにも注意したい。この時期における恋愛はあくまでも子役視されることからの脱却、さらには映画女優としての認知を促すものとして機能するに留まっていたとみるべきであろう。そして、作品が多種多様であること——新旧路線の混在、交互に制作された時代劇（男装する／しない、男役／女役）と現代劇（文芸作品や「大船調メロドラマ」作品など）、さらには狸御殿などの音楽を中心とした作品——を併せて考えると、この松竹優勢時代後期はいわゆる試行錯誤の時期であり、それゆえに映画における恋愛（あるいはほかの要素）が美空受容の枠組みを、前期と同じように提供することはなかったとひとまずは言えよう<sup>11</sup>。

<sup>11</sup> 各作品の詳細は以下の通り「通し番号、作品名 [封切年月日] 役柄【歌唱場面】」と記述する。①ひばりのサーカス 悲しき小鳩 [52.07.15] 学生だったが父がサーカスのピエロだと知り団員となる（両親は離婚している）。父が事故で瀕死状態になり、母を呼ぶが失敗。父の死後、母が引き取ろうとするが団に残る。【娯乐的に友人に披露／サーカス団入団を認めてもらうために歌う／サーカスの出し物として歌う／移動中の車で口ずさむ／子守りのために歌う／サーカスの出し物として歌う】②牛若丸 [52.09.17] 二役。牛若丸：母を慕いながら武芸に励み、最後には平家討伐のため京都から脱出する。桔梗：牛若丸を世話しながらその姿を見守り、最後に彼の身代わりで死ぬ。【自身の境遇を吟じる？(牛若)／口慰みに歌う(桔梗)／稚児舞の芸能者に扮する(牛若)／桔梗の死の背景音楽として】③二人の瞳 [52.10.23] 浮浪児の楽団のリーダー。真情を偽りながら知り合った米国少女の支援で孤児院建設資金を集める。自分の所業を悔いて謝罪しようとするも少女は帰国してしまう。【孤児院建設のための募金を呼び掛けて歌う／子守唄として歌う／遊びとして歌う／教会で合唱／飛行機を見送りながら口ずさむ】④リンゴ園の少女 [52.11.20] 歌のうまい少女。リンゴ農家の祖父と二人暮らししていたが、歌声がきっかけとなって実の父に巡り合う。始めは父を嫌っていた祖父が実情を知り態度を軟化させ、大団円。【祖父に歌を禁じられ戸外で独り歌う／作曲家(=実父)に歌を披露／十和田観光の背景音楽として／盆踊りで歌う／作曲家(=父)に作ってもらった歌の練習？／リンゴ祭の舞台で歌う】⑤ひばり姫初夢道中 [52.12.29] 姫役に肉親は父のみ。悪家老に命を狙われ、旅芸人の一座に身を隠す。持ち前の歌唱力で看板芸人になるも、悪家老一派に見つかり逃亡。その後、忠臣と一座の仲間たちの協力を得て、悪を倒し城に戻る。【道中で籠に揺られながら口ずさむ／舞台で変化しながら歌う／舞台で(剣劇をしながら)歌う／子守りをしながら歌う／一座との別れの背景音楽】⑥三太頑張れッ！ [53.02.12] テレビで歌う本人役。【テレビで歌う】⑦ひばりの歌う玉手箱 [53.04.29] 歌唱場面を集めた作品。【略】⑧姉妹 [53.04.29] 両親健在で三人姉妹の末子。姉たちの恋愛を助けようと躍起になるも、裏目に出てしまう。最後に自らの幼さを反省する。【歩きながら口ずさむ／中姉の誕生会で歌のプレゼント／歌で母に媚びる／家出中に心情を歌で吐露する？】⑨ひばりの陽気な天使 [53.05.27] 歌が好きな牧師の娘(父子家庭)。スウィングを聖歌隊の教師にたしなめられるが、孤児(?)のために誕生会を開き、その真心に教師が軟化、美空は祝いの席でスウィングを歌い上げる。【教会で聖歌隊の友人らと歌い踊って楽しむ／聖歌隊の合唱とともに讃美歌／父への謝意、あるいは嬉しくてつい歌う？／教会で孤児？と讃美歌／亡母が教えてくれた歌を孤児？に歌い示す／芝刈りをしながら

さて、前述の林（1954）による評文は次のように続く。

転換期を何の不思議もなく自然らしく通りすぎたのは、美空ひばりが恋をするに相応しい、若い、ほんとに若い時代劇の相手役、中村錦之介のようなスタアが発見されたからであるように思う。

枠組みを提供するような特徴はなかったものの、のちの美空映画の萌芽は間違いなくこの時代にあった。

続編では東映優勢時代として、その時期における美空映画の特徴をみていきたい。

## 参考文献

- 板倉史明 2009 「視線と眩暈——美空ひばりの異性装時代劇」四方田犬彦、鷺谷花編『戦う女たち 日本映画の女性アクション』東京：作品社：56-83。  
 大黒東洋士「日本映画・バンザイ」『映画ファン』12（12） 118-119。  
 小川順子 2006 「チャンバラ映画と大衆演劇の蜜月——美空ひばりが銀幕で果たした役割」『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』第33集：73-92。  
 尾崎宏次 1952 「今月の映画評」『近代映画』：100-101。

歌うが理由は不明／誕生日の祝いの席で歌う】⑩ひばり捕物帳 唄祭り八百八町 [53.07.14] 投げ縄と歌がうまい目明しの娘（養父、義姉二人）。実の父（大名）の周辺で起きた悪事を暴くと同時に、知人の敵討ちの手助けもした。実父と初の対面ののち、養父の元に戻る。【OPの主題歌／知人の尺八に合わせて歌う／お堀端で感情の吐露として？歌う／飲酒してほろ酔い気分で端唄を歌う／歌で混乱を鎮める／歩きながら口ずさむ／祭りの行列で街を練り歩きながら歌う／DVDでは実父に披露した踊りの場面はカットされているようだ】⑪ひばりの悲しき瞳 [53.08.19] 新制中学に通いクラスのリーダー格で歌がうまい（父子家庭、姉一人）。同中に勤務する父が卒業生に同情して修学旅行の積立金を貸してしまう。これがもとで家族は窮地に陥るが、最後は周囲の理解を得て大団円。【修学旅行で歌う歌の合唱指導／悲しい気持ちを歌で表現？／歩きながら学友たちと合唱、独唱もあり／修学旅行で学友たちと合唱（道中唱）／宿で歌を披露／送別の際に校歌を合唱】⑫山を守る兄弟 [53.10.27] 先祖伝来の土地を守る兄弟の弟（親はいない）。その土地を奪おうとする悪党と戦い、最後には勝利する。美空は短銃の名手として戦う。【馬上で口ずさむ／兄が弟を回想する場面の背景音楽／馬を引きながら口ずさむ／馬上で口ずさむ】⑬お嬢さん社長 [53.12.29] 祖父に会社社長のイスを譲られた孫娘（親はいない）。持ち前の歌唱力を生かしてテレビ番組を制作し、売り上げを伸ばす。会社乗っ取りをたくらむ一派を一掃する。【母を思っ一人口ずさむ／下町の演芸大会で歌を披露／社員に合唱指導／テレビの歌唱ショー／地方でのキャンペーンの背景音楽／物干し台で悲しみ？を歌う／舞台からテレビ中継】⑭美空ひばりの春は唄から [54.01.03] 歌唱場面を集めた作品。【略】⑮ひよどり草紙 [54.02.10] 養父と二人暮らし。親同士が結婚を考えている、相思の仲の二人が、それぞれの父の助命ために、逃げたひよどりを競って探すことになる。最後にはお上の沙汰により二人の助命が叶った。なお、途中で実姉が出現し、美空の危機を救うが名乗らずじまい。【道中で口ずさむ／茶屋で休みながら口ずさむ／本当に唐突に歌いだす（理由は不明）】⑯伊豆の踊子 [54.03.31] 兄を座長とする旅芸人一座の娘（親はいない）。修善寺から下田までの道中を一高生と共にし、淡い恋心を通わせるも、特に心情を打ち明けることもなく分かれる。【旅芸人一座が路上で流しの演奏（囃子言葉と太鼓）／座敷で剣舞の伴奏（太鼓）／道中の背景音楽／宴席で踊る／客の合唱の伴奏（太鼓）／宴席で踊る／道中の背景音楽／道中で口ずさむ】⑰唄しぐれ おしどり若衆 [54.05.03] 自分の兄の敵として、ある男性の命を狙う妹。誤解から最初は敵視するが、真の黒幕を知り、その男性とともに悪の一味を滅ぼす。恋心が芽生える【不詳】⑱青春ロマンスシート 青草に坐す [54.06.08] 両親健在で弟と出戻りの叔母と暮らしている。父に愛人がいることがわかり、ショックを受けるが、母は父を許す。戸惑いながらも美空とボーイフレンドは清い交際を心に誓う。【家路の途中で口ずさむ／来宅した彼氏とワルツを踊る／弟を交えて遊びながら／学校の友達とフォークダンス／テニスコートに独りで口ずさむ（寂しさの表現？）】



斎藤完 2010 「初期美空映画の特徴について：役柄とパターンに関する一考察」『山口大学教育学部 研究論叢 芸術・体育・教育・心理』第60号：127-139。

滋野辰彦 1952 「牛若丸 (日本映画批評)」『キネマ旬報』865号 (通巻)：62。

林勝俊 1954 「八百屋お七 ふり袖月夜 (日本映画批評)」『キネマ旬報』947号 (通巻)：49。

基井豊 1953 「こんな話題 こんなニュース こんな解説」『近代映画』：86号 (通号)：78。

鷺谷花 2006 「オルタナティブな読みの可能性へ《女の活劇》の系譜論 斎藤綾子編『映画と身体/性』東京：森話社：268-310。

著者不詳 1952.04 「ほんとに素直ない、娘です!!」『近代映画』76号 (通号)：50-51。

著者不詳 1952.07a 「あたらしく脱皮するひばりちゃん」『映画ファン』12巻7号：30。

著者不詳 1952.07b 「晴れのひばりちゃん」『近代映画』79号 (通号)：4-5。

著者不詳 1952.10 「『牛若丸』映画化異聞」『近代映画』：82号 (通号)：154-155。

## 参考資料 (プレスシート)

『唄しぐれ おしどり若衆』『八百屋お七 ふり袖月夜』

⑩びっくり五十三次 [54.08.11] 宿屋の養女。旅の途中で知り合ったやくざ者の活躍や恋愛を目撃する (自分にも彼氏がいる)。やくざ者の妹かとも思われたが実は違うことがわかる。【道中で口ずさむ／船中でおひねりをもらい旅費の足しにする？／歩きながら口ずさむ／素人演芸大会に出る】⑫八百屋お七 ふり袖月夜 [54.09.07] 八百屋の娘 (父子家庭、のちに離縁した母登場)。相思相愛の男性がいるが、悪徳商人の息子に横恋慕され、家の危機を救うためにその息子と結婚を決意。だが、その悪事を知り、相思相愛の男とともに悪徳商人一味を退治する【不詳】⑬若き日は悲し [54.09.29] 父子家庭で兄が一人いる。家業の窮地を救うため、有力者の息子と婚約することになったが、じつは兄が血縁ではないことを知り、すべての歯車が狂う。最後に「兄」は死に、日記から「妹」への思いが明かされる。二役で本人役もある。【自転車に乗りながら／美空ひばり (本人役) のリサイタル／ハイキングで歩きながら歌う／婚約者宅でのパーティー席上で】⑭歌ごよみ お夏清十郎 [54.11.01] 番頭の清十郎に心を寄せる大店の娘 (父子家庭、兄弟なし)。他店の陰謀により没落するも、清十郎の活躍で店が復興する。【宮参りの背景音楽／祭りでの演芸大会で歌う／人足たちに乞われて歌を披露】⑮七変化狸御殿 [54.12.29] 胡桃売りの狸娘 (親は不明) が、狸の国の若殿を救うために旅に出る。無事に若殿は救われ、二人は結婚する。【歌好きと明かされて歌う？／化けくらべ歌合戦で歌う／働きながら口ずさむ／若殿の歌に合わせて歌う／道中に口ずさむ／道中を駆けるときに歌う／長崎の街を歩きながら歌う／フランキー堺との音楽合戦／馬車に乗りながら歌う】⑯大江戸千両囃子 [55.01.09] 女歌舞伎一座の娘 (親なし)。舞台で使った扇子がきっかけで武家のお家騒動に巻き込まれるが、無事に解決。天涯孤独だったが、実の姉が見つかり、この騒動をきっかけに恋人もできた？【舞台で歌や舞を披露／道中で口ずさむ／唐突に歌いだす (理由不明)／座敷で日舞／唐突に歌いだす (理由不明)／舞台で舞う／御前で舞を披露する】⑰娘船頭さん [55.04.10] 祖父と兄の三人暮らし。兄は祖父の反対を押し切って上京したものの挫折し、祖父は身体を壊して他界する。美空は東京から来た青年に淡い思いを寄せるが叶わないことを知る。【子どもたちと合唱／船を漕ぎながら口ずさむ／請われてわかさぎ漁の途中で歌う／舟をこぎながら口ずさむ】⑱青春航路 海の若人 [55.04.19] 商船学校の学生が「先輩」と慕う男の妹 (家族は兄ひとり)。その学生が卒業前の遠洋航海に出るまでの成長の物語が主で、話の展開にはあまり絡まないが互いに思いを寄せている様子は窺える (特別出演)。【ハイキングしながら口ずさむ】⑲歌まつり 満月狸合戦 [55.05.01] 一人二役。一つは狸の国の王女。不幸な境遇だったが、狸の国から使者が来て自分の身許を知る。悪家老らの妨害を撥ね退け王 (実父) の元へ帰る。もう一つが武家の女中役で、皿を割ったことで自殺するが、魔法使いの同情で生き返る。【祭りで歌う／洗濯をしながら口ずさむ／美空を探しに来た男と踊る／歩きながら口ずさむ／皿を拭きながら口ずさむ／入水自殺時に口ずさむ／大団円で舞踊メドレー】